

上來は修禪觀照入解の要義を陳述し終る。此教は一切衆生を攝益してあまさいるものなり、左に一文を引て歸結とせん。

良以、如來說法之儀式、必主伴相從、菩薩聲聞定對、如來問答發起、其軌儀皆驚乎耳目、其法則悉授於衆生、若衆生若佛若非情若情有、所作者、於性起緣起門、互無非本影乃至、當知、順違待人之信否、深法無佛之簡別也。

三、「華嚴唯心義」の梗概

一

先きに上人の著「信種義」と「入解脱門義」の要旨を紹介し終れるを以て、是より「唯心義」の要旨を陳述せんと欲するなり。此書の由來を尋ぬるに本書の始に曰く「建仁元年春の頃ほひ、小僧別縁ありて久親里の中に遊行す、爰に數多の女房親類あり、さきより久しく此偈を受授せり、對面の次で毎に請て云く、願くば此頌の大綱を聞て愈々微心を勵さんと思ふ、小僧深く愚見を憚ると雖、猶ほ懇懃の請に堪へず、之に依て

本頌の大意に任せてなまじいに此略釋を作る」とあり。之を「明惠傳記」(喜海)著に對照するに、「建仁元年^{辛酉}二月の比如心偈の釋并に唯心義二卷作之」とあり。蓋し建仁元年は上御門天皇の御宇にして西紀一千二百一年にあたり今を去ること七百七年前なり即ち數多の女房親類の願によりて本書をあらはされたるものなり。

本書は上卷は彼「華嚴經」の有名なる頌文、即ち「夜摩天宮雲集說偈品」如來林菩薩所說の頌文(新版大藏經にては湯坐十卷六十三丁にあり)を註釋せるものなり。下卷は「便に因て邪執を破す」とありて、眞前妄後悟、後再迷、無明起因の難所謂一乘三難を遺憾なく破斥せるものなり。今先づ次第に隨て上卷より之を述ぶるに、其頌文に云く。

如心佛亦爾、如佛衆生然、心佛及衆生、是三無差別。諸佛悉了知、一切從心轉。若能如是解、彼人見眞佛。心亦非是身、身亦非是心。作一切佛事、自在未曾有、若人欲了知、三世一切佛。應當如是觀。心造諸如來。

明惠上人は理論智解を喜ぶ人に非ずして實踐實行の人なりしなり。殊に釋迦如來在世の昔に生るゝを得ずして滅後の末代に生れ、親く尊容を拜して金口の說法に遇はざるを悲しみ、せめては天竺に渡りて親く如來の遺跡をとむらはんの志を起し、再三渡天の計畫をなせども不幸事情に碍げられ之を果すを得ざりき。されば縁にふれては釋尊の在世を忍ぶの念轉々禁する能はざるものありき。今此頌文を註釋するにあたりても如來を追懷する念誠に深きものあり。上卷末尾に云く、「上略云何に況や今の頌中に若能如是解彼人見真佛と説けり。誠に悟の前の境界は是其實の在世なり。彼首婆波羅長者は不滅度除法門を成就して一切如來の常身を見る、我亦此妙偈に遇ふて三世諸佛の眞體を知る、まさに知るべし如來の在世なり、差別あることなし、但我等此理を聞くと雖、猶し色身をこゆる思ひ斷へず、我世尊の入滅を唱へ給ひしことは便ち今月十五の夜半なり、哀哉數萬の年數を送り、月はかはるゝ來り去れども、實に寂滅を示し給ひし月は、唯二千餘年の前にあり。我等獨り滅後のみなし子となりて、双林入

滅の昔を思ひやれば五十二類の哀感せし思ひ胸中にわき、大聖慈父の慰諭を垂れ給ふ所只今聞が如し。悲哉我等薄福の身に空く戀慕の涙を以て手を洗ひ、重障の心に徒に在世を戀ゆる思ひ押へ難し。誠に我等一心に此法門を誦持して、近くは現在如來生身の御かたみとし、遠くは未來見佛聞法の因を結ばん。乃至住行向地の諸の功德を備へて、必ず如來の眞妙法身を證せん、以て其意を知るべきなり。

昔我が世尊釋迦牟尼佛、初て正覺を成て第二七日に至るに七處八會に遍ふして此經を説き給へり。此頌は是れ七處の中には夜摩天の處八會の中には第四の十行會の所説なり。云く如來十行の法門を説かんとれほすが故前きの三處を離れずして夜摩天宮に上て寶莊嚴殿寶蓮花藏師子座上に座し給へり。爾時十方各十方佛刹微塵數の世界の外の大菩薩衆、各々一佛世界微塵の菩薩と俱に佛所に來て集れり。其時如來師子座上に結跏趺座し給へり。色相殊特にして世間に喩なし。功德莊嚴の姿極めて珍らしく、慈悲愛敬の相外に顯現せり。諸大菩薩前後に圍繞して佛徳を莊嚴す。猶ほ師子王の師子

を眷族とせるが如く、栴檀林の栴檀のみ圍繞せるに似たり。十萬の天子各歡喜の心に住して前に在て立侍し、十萬の梵天悉く愛敬の思を含て四邊に在りて瞻仰す。莊嚴十方を備へて行位漸く増す事を顯はし、大會十方に遍して一一數量計り難し。爾時如來両足の指より百千億妙色の光明を放つて徧く十方一切の世界を照し給ふに、一一世界の中に諸大會悉く顯現せり。時に爾功德林如來林等の十菩薩、佛會の中にして各々佛神力を受け大梵音をふるいて微妙の偈頌を説く。一々の頌中に皆諸法の眞理を顯示し如來の寶徳を讚嘆す。是則其中の如來林菩薩所説の偈頌なり、此段に總じて十行の頌あり。始六行の頌は心の凡夫となることを明かす、後の四行頌は心の如來となることを説けり。是則後の起聖の頌也。

頌文の如心佛亦爾と云ふは、云く、上の頌に一心の凡夫をつくることを説けり。故に凡夫を擧て佛に類するなり。云く心の凡夫をつくるが如く佛を造ること亦爾なり。如佛衆生然と云ふは。佛を擧て凡夫に類同するなり。心佛及衆生是三無差別と云ふは

會して三無差別を顯す。云く、此心佛を造れば心と佛と差別なし、此心は凡夫を造れば心と凡夫と別なし、心をは所依とす佛と衆生とれば能依とす、能依所依同きが故差別なしと云ふなり。諸佛悉く知一切從心轉と云ふは上人の所知を擧て下の衆生を勸むるなり。上人と云ふは諸佛なり。云く、諸佛已に一切の法は皆此一心より起ると了知し給へり。若能如是解彼人見眞佛と云ふは、下人を勸め上人に同せしむ。如此悟る人と云は上の唯心の道理を知る人なり、若し此甚深唯心道理を悟る人は便ち如來の法界身を見る人なり。心亦非是身身亦非是心と云ふは、此二句の頌は、身心互に即せることを明すなり。云く、此身は心によりて變現するが故心をは能變とす、身をは所變とす。便ち上に云ふ所の心境依持の中の心をは能變として境れば所變とするなり。又心を性とし身を相とす。便ち上に云ふ所の眞妄依持が中の眞れば性とし妄をは相とするなり。能所二變已にかわり性と相と又別なるが故心と身と不同にして即せざるなり。所以に心は身に非ず身亦心に非すと云ふなり。作一切佛事自在未曾有と云ふはふこれは

身心不離の義を明かすなり。云く、身心互に相知せずと雖、然も心に依て身境を現し心體に依て身用を起す。若人欲了知三世一切佛應當如是觀心造諸如來と云ふは衆生を勸めて此唯識觀を修學せしむるなり。以上は「唯心義」所々の要文を略出して頌文の大要を示せるものなり。其詳細は今此處に盡すべきに非ず。明惠上人此頌の徳を嘆して云く、「此頌は是三世の諸佛の眞體一切衆生の極性なり。文約かにして無邊の義理を含み、言たやすくして難思の功德を備たる所以に、少分を持つに能く地獄を破る。中略暫くたい一偈を持つて益を得ること此の如し。況や具足して一生の間受持せし功德れや。これ心性を誦するが故、念々に三業の不淨を清め、常恒に佛の身體を見るなり。悲哉や、我れ如來滅後に生れて生身の宿を見奉らず、是れ長夜が中の恨なり。然るに纒かに機感の數につらなりて偶々遺物に遇へり。暗に燈を得、渡りに船に逢へるが如し」と、上人の眞精神以て知るべきなり。

二

これより進みて下卷の綱要を述ぶるにあたり、簡單に要文を抜出して其趣意を明白にせんと欲するなり。このころ或は雜言說法を事とし或は世間事務にいとまなき僧有て、細かに聖教の文句を尋ねず、自ら愚案を恃んで纒に眞如受薰の文を聽て委く其義を分別せず、妄りに在家の女房に告て云く、一切衆生は昔本覺の都にあり、妄執にさそわれて今生死の凡夫と成ると云ふが如く、此邪言を吐きて自損々他の大過を招く、或は縦ひ説者は知れりと雖、聞者の邪解をなさんことを恐れて、安く法身流轉名爲衆生の經文を引き、自性清淨心無明風動の論文を出す。纒に文訓して其義を陳せざれども、先より聖教の大意を得ざる人、始めて此言を聞くに皆眞先妄後の邪執をねこす、悉く擧て是の如し、ことばをなさく、我昔如來なりき、何ぞ又凡夫と成りしと云ふ。上人此言をきくに其心さくか如し。此處に問答を設け、問に邪執をあげ答に正理を示すなり。問ふ、若し眞如隨縁して一切の妄法と成ると許さば此眞如を證得せる修生の佛果より又隨縁して衆生界となりて生死に輪轉すべし。所以に聖教の中に此眞心隨薫

の道理を説くに生住異滅の四相の階降を論ず、これ豈本覺佛性を分れて生相の始より滅相の終に來るに非ずや。答ふ、此事しからず。汝縁起の法に迷ふて邪執をなせり。云く眞妄二性は俱有因果の如し更に前後の差別なし。然るに汝此隨縁の道理を聞て、眞は先きに在り妄は後に來ると思ふて、彼に例して又佛果隨流の疑を成す。云く、無明は眞理に依止す、眞理本有なれば無明もまた無始なり。この故聖教の中には無始無明住地と名く。若し汝が執の如くならば生死は初際あるべし、是則聖教所説の不可説事の中の一句なり。捨置記を爲すべし。只聖教の中に眞如隨縁して生死の妄法を生ずと云ふは、云く、一切種智を以て、法性の根源を尋ねて相を盡くし性を窮はむるに、如此愈細の品類あり。此中に於て汝が云ふ處の生住異滅の四相を立つるなり。汝纔に四相の名字をきくと雖未だ義門の宗趣を知らず。今汝が爲に彼の四相に就て略して流轉還滅二位の分齊を演へて、生死大夢の四相たゞ是れ一心にして前後時限の差別なきことを知らしむべし。先づ其四相と云ふは、一には生相、此中に一轉あり名て業相と

爲す云く、無明不覺の心動するに依て纔に起滅ありと雖、最微細にして相見二分未だ分たず云く、無明に依るが故自性淨心を轉じてこの動相を生じて行相きわめて微細なり、起滅の始なれば名て生相とす。問て云く、無明とはこれ何物ぞや。答て云く、此無明行相大小二乘諸論藏の中に重々分別あり具に出すに由なし、今大乘實教の意に就て一重の義を出すべし。云く、無明と云ふはこれ明か所知なり、明と云ふは本覺眞心なり、此心性は不生不滅にして起滅の體に非ず、是に迷ふが故、起動の心忽ちに生ずるを無明と名くるなり。二には住相此中に四轉あり。一には轉相と名く、云く、無明の力に依るが故、先きの生相の位の動相即空と知らざるが故轉じて能見を成するなり。二は現相と名く、無明に依て無相の理に迷ふが故遂に境界をして妄に現せしむ。三には智相と名く、云く無明に依て先の自心所現の境に迷て妄りに染淨を分別するなり。四には相續相と名く、云く無明に依て先の染淨分別は空くして所有なしと知らずして更に妄念を起す。此四種れば同く住相と名く。三には異相此中に二轉あり。一には執

取相と名く。云く此無明染淨違順の法に惑ひて更に貪瞋人我見愛を起して相を執して捨てず。二には計名字相と名く、云く、先の人我見愛に依て諸相の上に於て各名字を施設す、執着最深し。云く無明先きの住相と和合して彼淨心轉して此位に至らしむ。身口を散動して諸業を作ること、先の住相に替りてや、愈強なれば名て異相とす。四には滅相此中に一轉あり名て起業相とす。十信の先き邪定聚の位にして無明の力に依るが故、善惡因果の道理を悟らず、廣く諸縁に對して諸趣に墮せしむ、無明の力を以ての故、彼淨心を轉じて此後際に至る、先きの生相の力是を以て極めて一周の終なれば、滅相と云ふなり。四相と云ふは、真心に隨薰の愈細の差別に就て建立するなり常の如く四本相四隨相などと云ふ時の有爲の四相には非る也。此中には流轉門の次第にまかせて細より愈に至りて次第を列すと雖、實には四相同時に和合して起滅するを衆生と名く、更に前後時限の差別あるに非るなり。譬へば一つの大摩尼寶珠あり、鑽垢共に存せるを璞とす。巧匠此珠をときみがくに愈細の塵垢あり、種々の方便を設け

て愈より細に至て皆ときみがきて明性を顯はす。然るに其塵垢に四重の愈細あり。其中心は摩尼珠の體なり、明性具足せり。外面より中心に至るまで次第に外は愈中は細なり。然ら彼四重は摩尼隨薰の愈細の不同に就て次第を列ぬれども、全く前後時限の差別あるに非らず、只一の珠體具足して名て璞とするが如し。此中の道理亦然なり。亦本覺佛性を中心にして其外に結業の塵垢なり。諸佛の智慧さきに既にこれを磨き顯して如來の名を得給へり。其の塵垢の愈細をみるに此四重の不同あり、云く、最本覺に近き邊をば生相と名く、最極微細なり、乃至次第に尋ね來て最本覺に遠き邊をば滅相と名く、是は極めて愈品なり。真心隨薰の道理に就て此の如く判すれども、全く生相は先き滅相は後と云ふに非るなり。これは本覺隨薰起滅流轉門の分位に於て此不同を論ず、此位に於て衆生界を安立するなり。聖教の中に四相流轉を説て生死大夢と名けたり。云く、信等の五位の中に於て其智慧の力に隨て分々に覺知して念をさます、さめれば即佛大覺の位に入るなり。汝は則彼愚惑者なり、早く過を改むべし、衆

生昔法身なり今凡夫となると云ふこと勿れ、只云ふべし、衆生の體は即法身なり、妄想相續して五蘊の假形あり、本質の上に影像を現するが如しと云ふべし。云何に況んや此妄法を翻して一度佛果を得つる後には長く未來を盡して終あることなし。起信論に云く、染法は無始より已來薰習して斷へざれども佛になりぬれば長く盡きぬ。淨法に薰習しぬれば即ち盡る期あることなし。未來を盡すと云へり。香象大師釋して云く染法は眞に達すれば始なくして終あり、淨法は理に順すれば始有て終無と云へり。問て云く、忽然に念動するを無明とすと云は、豈始めて起るに非ずや。答ふ、汝未だ法門の宗趣を知らず、汝眞理に於て始ありとやせん、若始ありと許さば諸法の所依たるべからず。若所依なくば一切の法皆斷滅しなん。便ちこれ斷見に隨す、所依なくして猶有なりと云は、又常見に隨しなん。然るに此過なきが故眞理本有なれば無明もまた無始なり。所以に香象の云く、「無明依眞無元始」と云へり。但し忽然に念れけると云ふは、云く眞理湛然として動念の體に非ず。無明は遙に眞理に相違せり。然るに此眞理

に相離れずして無始なり。而も其性遙に違へり。眞理は主の如し、無明は客の如くかりそめなり。此義邊を説て忽然に念を起すと云ふなり。時節に付と云ふに非ず。先の摩尼珠塵垢の喩此中に陳すべし。問て云ふことあらん、此摩尼珠は體性明淨なり、何の處にか塵垢あらんや。答て云ふべし、此珠體光潔の分に相違して忽然に塵穢の垢ねこるを名て塵垢とする。ねこると云ふは今始めて生ぜるに非ず、珠體をば湛然とす、塵垢をば庵強とす。此湛然の本性より尋ね來て此本性に相違して庵強の邊に到て起ると云ふなり。然れども此塵垢は珠體に依止して前後差別なきなり。此中の眞理亦然なり、忽然に念れけると云ふは、云く眞理の中には動念の性なし此理性より尋ね來るに始めて此無明動念の體をみるなり。之を忽然念起と云ふ、敢て有始と云ふに非るなり。問て云く、如來は一切種智を得て一切種類の法を知り玉へり。能く生死の始を知るべし、何ぞ不可説事を立て玉ふや。答て云く、智に倒謬なし、實の如く能く知る。色法をば色法と知り心法をば心法と知り、過去をば過去と知り現在をば現在と知り、未來

をば未來と知り、有始の法をば有始の法と知り、無始の法をば無始の法と知る。如此
 一切種類の法皆能く實の如く知るに際限あることなし、所以に生死はこれ無始の法な
 り。問て云く、若し修生の功德法身を以て體とせば、法身は即ち眞如なり、眞如には
 不變の體大あり。相用二大所攝の報化等は妄情に歸すれども體大失せざるべし、これ
 何の過あるや。答ふ、眞如の體大は一切有情に適すと雖、未だ相用二大あらはさる
 をば衆生と名く、此三大を顯しきはむるを佛と名く。所以に此相用二大所攝の修生の
 佛果若し生死妄情に歸せば佛果皆滅しなん。又如來藏心合不和合二門を立ることは獨
 り衆生位にあり、第十地滿金剛喻定の位にして和合識の中の生滅の相を破して唯不生
 滅法身の性のみ存す、此故佛地に於ては此和合の義なし、いかでか亦生等の四相と合
 して衆生界となることあらんや。

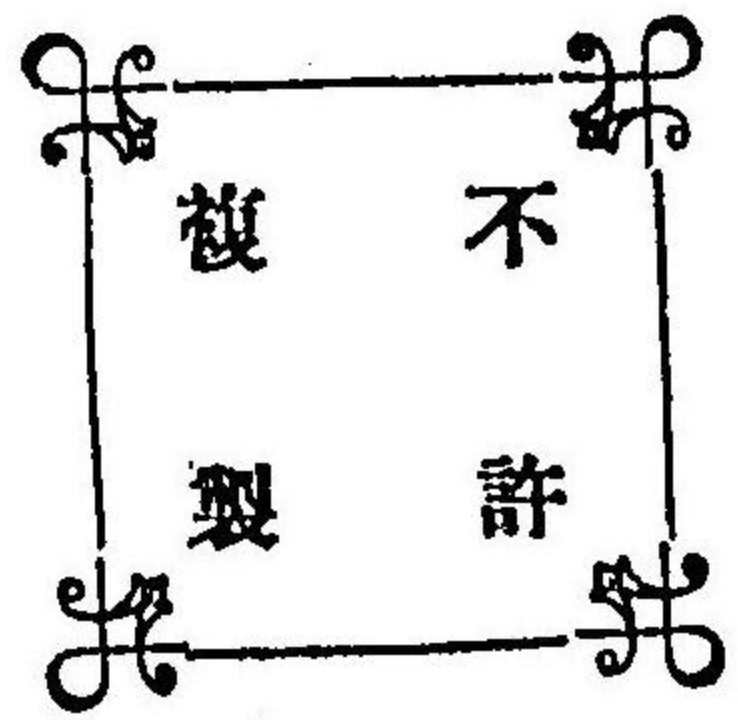
以上要文を摘鈔して下卷の綱領を示すこと此の如し。上來の所述は敢て理論智解を
 算するに非ずして、愚迷の邪執を排して出離をあやまらざらしめんがためなり。亦唯

出家の人の爲に非ず在家の人のためなり。「天竺大唐の傳起をみるに必ずしも僧のみ
 に非ず、在家の男女の中にも、世間をねがひて迹を幻境にすまし心を眞際にとめたる
 人其數一に非ず」されば在家の人と雖華嚴觀に心を住すること難しと云ふべからざる
 なり。「白線は染に隨て色をあらたむ、人の心は友によりて行をなす、若し善友の
 教誡を受けば、何で必ずしも難となさんや」以て本善旨趣の存する所を知るべきなり

附 録 終

明治四十二年二月十一日印刷
同 年二月十五日發行

明憲上人贈與附
定價金四拾五錢



著作者 和田龍造

發行所 西村七兵衛

京都市下京區中珠敷屋町烏丸東入
二十人町三十三番月

發行所 京都市東六條(電話貳貳五八番)
藏館

賣捌所

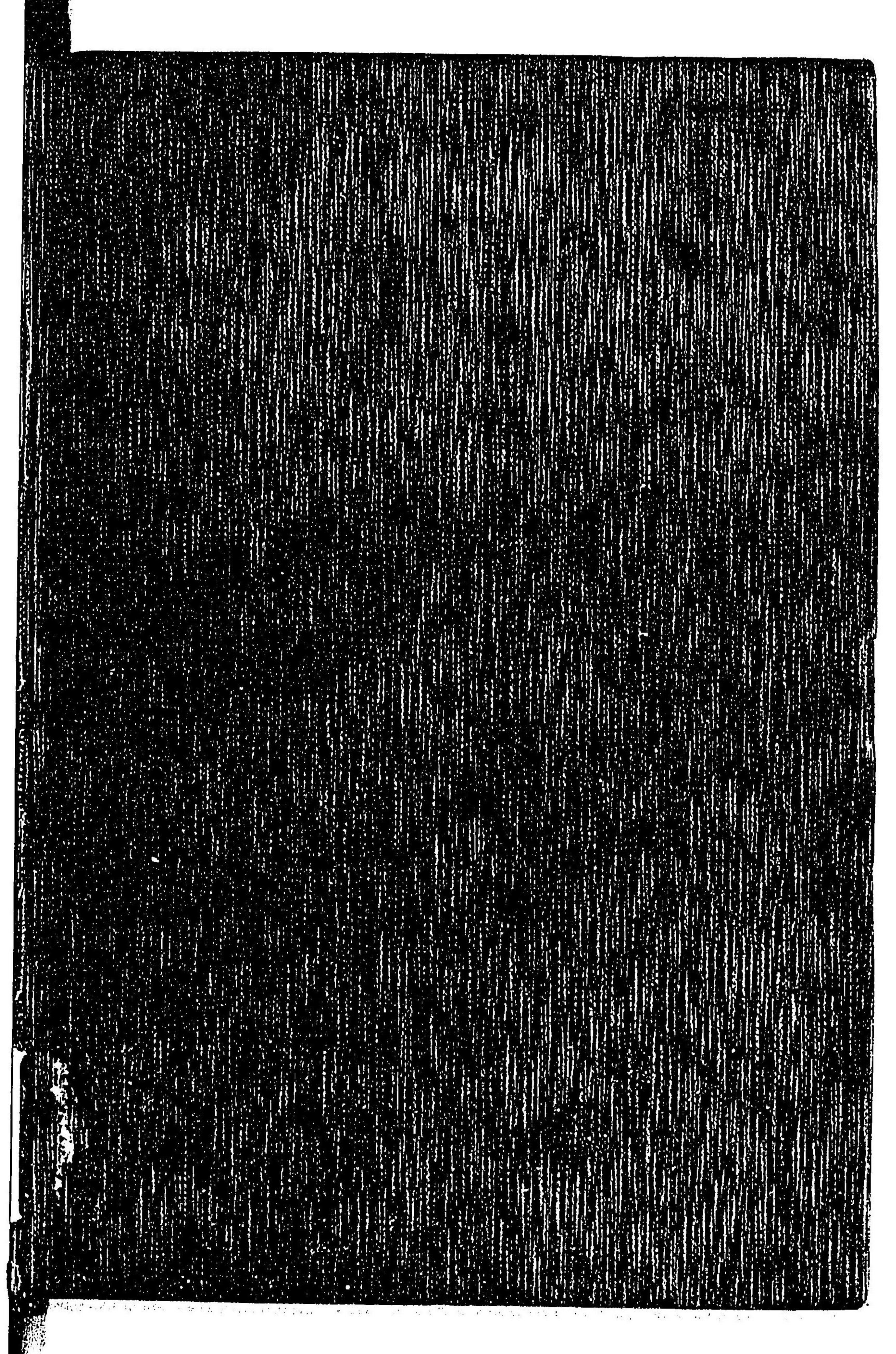
京都 隆法館
京都 興教書院
京都 文津堂
京都 顯道書院
東京 無我山房
東京 森江書店
廣島 洗心書房
京都 下村法林館
京都 顯道書院
東京 光融館
鴻盟社
名古屋 其中堂

和 田 龍 造 先 生 著

●香月院語錄 金壹圓 郵稅不要	●三經交際論 金五拾四錢 郵稅四錢	●阿彌陀經達意 金參拾五錢 郵稅不要	●宗教管見 再版 金貳拾五錢 郵稅不要	●人生問題 再版 金貳拾五錢 郵稅不要	●佛教信者の喜び 金拾貳錢 郵稅貳錢	●他力宗教論 金參拾五錢 郵稅四錢	●偉人之言行 金六拾五錢 郵稅六錢	●宗教問題 金六拾八錢 郵稅八錢	●龍樹佛教觀 金參拾五錢 郵稅四錢	●續香月院語錄 近刊
-----------------------	-------------------------	--------------------------	------------------------------	------------------------------	--------------------------	-------------------------	-------------------------	------------------------	-------------------------	---------------

東京市東區六條 法藏館 電話 貳貳五八番 口座 七〇四番

325
175



325

75

016306-000-7

325-75

明恵上人語録

和田 龍造/編

M42.2

ABD-0225



